

石井方式を実施するのに、最も必要な心がまえは何か。

たびたび述べていますように、「漢字を教えようと思うな。漢字で教えているのにすぎないのだ。」ということです。

塀の節穴からのぞかれるのがいやで、「この節穴よりのぞくべからず。」などと書きますと、かえって、のぞき見する者が多くなるでしょう。書いてなければ、見ようもしない者でも、こんなことが書いてあると、かえって何だろうという気持ちを起こさせます。

親や教師は、つい欲が働いて、度を過ごすのが欠点です。食べ物でも、やかましく言いすぎてかえって食欲を減退させています。おいしいものでも、口へ詰め込まれたのでは、食べる気がなくなります。親がおいしそうに食べてみせれば、子供のほうから食べさせてと言うようになります。

漢字教育も、「この字は××という漢字よ。覚えなさい。」と言うのはいけません。子供のほうから、「これ、なあに。」と質問し、それに答えてやるのがいちばんよろしい。

子供は、知識欲が旺盛で、うるさいほど何でも聞きたがるものです。子供は、関心をもって尋ねたものは、教えられるといっぺんで覚えてし

まいます。だから、教えようとする漢字を、子供の目の触れやすい所に用意しておき、子供の関心を呼び起こす工夫が大切です。

関心が強くなかった場合、何回教えてやっても覚えないことがあります。その場合、「まだ覚えないの。もうこれで×回教えてやったのよ。」と子供を責める人があります。

漢字が早く覚えられないのは、子供の責任ではありません。子供が、親の期待どおり覚えてくれないからと言って、どうして責められる理由があるのでしょうか。

何回教えても覚えられないとしても、覚えられるまでは、いつでもやさしい気持ちで教えてあげてください。ことに、何回教えられても覚えられない字を質問するのは、大変ほめられてよいことです。

「覚えられるまで教える」これが教育というものだと思います。それに、覚えるのに手間取るほど覚えた時に、その記憶は強固なものになります。早く、簡単に覚えられたものは、やはり忘れるのも容易なのです。

そう思ったら、なかなか覚えられない子供ほど頼もしい子供ということができます。「これで二十回め。まだ覚えてくれない。ああありがたい。」と思うべきです。